

# 「問い」と「答え」のズレからみるアイデンティティ

## —在日コリアン親子によるナラティブの分析から—

薛桃子(大阪大学大学院)

### 1. 研究の背景と目的

現在日本には朝鮮半島にルーツを持ち、日本による植民地政策の影響を直接的・間接的に受け、1910年代から1945年前後に日本へ渡ってきた者およびその子孫である「狭義の在日コリアン<sup>1</sup>」(オールドカマー、特別永住者とも称される)が約31万人存在する。これまで在日コリアンのアイデンティティについては、福岡(1993)や福岡・金(1997)に代表される量的調査によってアイデンティティを類型化し、その傾向を探る研究や、金(1999)や李(2016)のインタビュー調査から民族アイデンティティの揺れを描きだした研究等、社会学的な視点から多くの研究がなされてきた。本研究の目的は従来の研究ではあまり見られなかった社会言語学的観点からナラティブという相互行為の中で構築されるアイデンティティとそこから垣間見える在日コリアンが生きる社会的現実を明らかにすることである。

### 2. 研究方法

#### 2.1 調査方法

本研究では在日コリアン3世である調査者と在日コリアン2世である筆者の父親(以下、桓一：仮名)によるナラティブを収録(録音・録画)し、分析した。桓一の基礎情報を表1に示した。

表1 桓一の基礎情報

年代・国籍	60代・韓国籍
居住地	過疎化の進む地方Aに生まれ、現在も在住している。
名前	民団 <sup>2</sup> 等の活動の際は本名(韓国名)を、仕事等では通名(日本名)を使用し、2つの名前を使い分ける。
家族	同じく在日コリアン2世の妻と結婚。桓一の子は日本人と結婚し、ダブル(ハーフ)の孫がいる。
言語	第一言語：日本語、第二言語：韓国語。40代以降に韓国語学習を開始し、現在は意思疎通が可能。
民族団体活動	民団A地方本部の団長を長年務め、現在も日韓交流事業や在日コリアンシンポジウム等の企画・運営に携わっている。民団中央では幹部役員を歴任。地方参政権運動等の権益擁護運動に携わってきた活動家。

#### 2.2 分析枠組み・分析方法

本稿では、スモール・ストーリーの概念(Bamberg, 2004; Georgakopoulou, 2007)を援用して、桓一と調査者が協働してナラティブを構築する過程を分析し、ポジショニング理論(Davies & Harré, 1990)の観点からナラティブの中で自己をどのように見せ、位置づけているのかを探る。

### 3. データと分析

本研究では、桓一にとっての「母国語」という言葉のとらえ方、定義について確認するやりとりが行われた後、桓一にとっての「母国」はどこかという話題に発展した部分を分析した。

<sup>1</sup> 日本に在住する朝鮮半島にルーツをもつ人々を指す呼称としては、「在日朝鮮人」「在日韓国人」「在日韓国・朝鮮人」「在日コリアン」「在日」等、様々な言葉が存在するが、いずれもある程度政治的な色彩を帯びた言葉であるといえる。本研究においては、分断国家のどちらかの政府やその思想への支持を示す呼称や、分断的・二分法的思考に基づく呼称を避け、「在日コリアン」という呼称を採用することとした。また、広義の在日コリアンには、主に1980年代以降日本に渡り長期滞在する韓国人(ニューカマー)や、本人あるいは親が帰化したり、国際結婚の出生(ダブル)により「日本国籍」をもつ者が含まれる。

<sup>2</sup> 名称は「在日本大韓国民団」。日本で唯一の韓国政府公認の民族団体であり、差別をなくす運動、在日韓国人(帰化同胞含む)の権益擁護運動、民族教育・次世代育成事業、在日韓国人の生活支援サービス、日韓交流の促進事業等を展開している。

データ1:「祖国・故国・母国」ナラティブ (調査者:桃子 分析対象者:桓一)

1. 桃子: じゃあ(.)お父さんにとっての母国は韓国なの?
2. 桓一: (..) 難しい質問だ[な
3. 桃子: [@@@@@(.)>なんか×私はあえてあの(.)母語という言葉は使うけど
4. 母国語って言う言葉は使わないようにしてて=
5. 桓一: =↑ん:
6. 桃子: あまり(.)使いたくない@@@
7. 桓一: ↑ほんとだな
8. 桃子: ↑母国って↑何?っ¥ていう¥(.)感じがして hhh(..)
9. 桓一: あの:田中克彦という言語学者が(.)あの:ま古い言葉でえ:(..)国家と言語だったかな言葉と国家だったかな
10. 岩波新書か岩波文庫で出てるけど古い本なんだけどそこで(.)きれいにその在日のその(..)あの(.)まあ
11. 古い本だから70年代の本だったかな初めのその当時外国人ってやっぱしほとんどが在日だったから
12. 日本でそこでの在日の実態を照らして(..)母国故国祖国っていうのを分けてたけども概念を3つ(..)
13. あの祖国っていうのは(..)やっぱし:両親ふる両親や祖父母の国(.)祖国(.)ということなんだろうしじゃあ
14. 故国っていうのは(.)故国っていうのはどこなのか(..)1世にとっては故郷の故だから(.)韓国朝鮮だろうし
15. (.)>だけど<我々2世にとってはどうだろう(..)で今言った母国語の母国って(..)どこだろう
16. で2世や3世にとっての故国はやっぱし(.)私は(.)あの:ここ(.)ふるさとA(出身地, 現在の居住地名)
17. [じゃないかなと思うんだけどな]
18. 桃子: [(大きく頷く)]
19. 桓一: で母国っていうのはま:解釈の問題もあるだろうけども:(.)え:ま国籍国(..)
20. 韓国っていう国:の国籍国を選んでるから(.)
21. 自分が選んだんじゃない両親が選んだんだけど(..)だからま:母国はとりあえずは韓国かな>ただく
22. ふるさとの国である故国¥は¥Aかな日本(.)日本っていう国の中のAなんだろうけど
23. 当然国民国家の上での日本とは言えないな(.)なぜかって私は(.)あの韓国籍いまだに保持しているし
24. (.)だから(..)ま:あの(.)ありジョナルな地域性でふるさとを語る↑なら故国としてのAかなっと思う(.)
25. 桃子: そ:よくなんかふるさとはどこですかとかって聞かれるときにたぶん聞いている方は
26. 韓国のどこっていうのを¥聞いているんだけど¥=
27. 桓一: =そうだろうな
28. 桃子: ¥いやいやいやあ:hh>° みたいなく° Aです¥てよく答えるけど
29. 桓一: と言うしかないと思うんだけどな
30. 桃子: ((頷く))

### 3.1 「故国」スモール・ストーリーⅡと「故郷について尋ねられる」スモール・ストーリー

1行目「お父さんにとっての母国は韓国なの?」という桃子の質問に対して、桓一は「難しい質問だな」として即答せず、9行目から田中克彦氏の『ことばと国家』という本でまとめられている「祖国」「故国」「母国」の定義を借りて、桓一にとっての「祖国」「故国」「母国」がどこなのかを整理しながら述べている。本稿では「祖国」「母国」「故国」について語るそれぞれの語りをスモール・ストーリーとして捉える(表2)。

表2 「祖国」・「故国」・「母国」スモール・ストーリー

行	スモール・ストーリー	桓一にとって祖国・故国・母国はどこなのか(田中克彦の定義を参考に)
① 13	「祖国」ストーリー	「祖父母の国」= 朝鮮(分断される国家が成立する以前の朝鮮)
② 16	「故国」ストーリーⅠ	「ふるさとA」= 日本の中のA(日本の出身地域, 現在の居住地)
③ 19~21	「母国」ストーリー	「とりあえずは韓国かな」= 韓国(母国を国籍国として定義した場合)
④ 22,23	「故国」ストーリーⅡ	②と同様

まず、「祖国」については、祖父母の国であると述べているので、現在の分断国家になる以前の朝鮮を指していると推測する(表2の①)。続いて「故国」については「ふるさとA」と述べ、出身地であり現在の居住地である日本のAという地域名で答えている(②「故国」ストーリーⅠ)。次に、本ナラティブのテーマである「母国」については母国を国籍国として解釈した場合としたうえで、「とりあえずは韓国かな」と述べている(③)。そして、「母国」について語った直後に畳みかけるように「ただ」(「ただし」)という接続詞をつづけて、再び「故国」ストーリーに話を戻している(④「故国」ストーリーⅡ)。

さらに桃子は「故国」ストーリーⅡの直後(25~28行)に「故郷について尋ねられる」スモール・ストーリーを挿入している。本稿では、「故国」ストーリーⅡと「故郷について尋ねられる」スモール・ストーリーに着目し、これらのスモー

ル・ストーリーにはどのような機能があるのか、なぜ語られたのか、そして、これらのスモール・ストーリーを挿入することによって会話参加者が協働してナラティブを構築していく過程を分析していく。

### 3.2 「母国」ストーリーの矮小化（後景化）と「故国」ストーリーの補強（前景化）

スモール・ストーリーはこれまで「前述の言説を例示する」「意見を補強する」「詳細に説明する」等の機能(De Fina and Georgakopoulou, 2012)や、「自分や他者の前言を撤回したり矮小化させたりする機能」(秦, 2017)が例証されている。

「故国」ストーリーⅡは、「母国」ストーリーが話された直後、速いスピードで「ただ(し)」という接続語を続けることで聞き手の意識を母国から故国へと引き戻し、既に語った内容を再び語っており、桓一にとって重要なのは「故国はAである」ということを強調していると分析できる。したがって「故国」ストーリーⅡは「母国」ストーリーを「矮小化させる」機能と同時に、前言した「故国」ストーリーⅠを「補強する」機能を担っていると考えられる。「故国」ストーリーⅡが語られた要因としては、国籍という制度上の母国よりも地域としての「ふるさとA」に愛着を感じる桓一の思いをあげることができるが、別の要因としてナラティブの協働構築者である桃子の影響も考えられる。続いては桃子が桓一の「故国」ストーリーⅡの発話にどのように影響を与えているのかを見ていく。

桃子は3~8行目で「↑母国って↑何?って感じがして」母国語という言葉をあえて使わないようにしているとして「母国語」という言葉に対する違和感を述べている。桓一は桃子の4行目の発話に対し声のトーンを高くして5行目「↑ん:」と間髪入れずに反応しており、7行目では「↑ほんとだな」と同意しており、桃子の「母国語」という言葉に対する違和感に共感を示しているとみられる。しかしながら、桓一の「母国」ストーリー(19~21行目)では、母国を国籍国として捉えた場合「とりあえずは韓国」と答えている。つまり、3~8行目の時点では「母国語」という言葉に対する違和感を互いに確認しており、立場の均衡を保っていたが、「母国」ストーリーが始まると、桓一と桃子との間に意見のズレ、不一致が生じてしまったのである。秦(2017)では、意見の不一致が生じた会話において、「話題の微細なシフトにより不一致以外の話題を前景化させて意見の食い違いを暗黙裡に封じ込めようとする戦略」としてスモール・ストーリーが現れるとしている。また、本データの18行目では、桓一の「故国はAである」という発言に対して桃子は大きく頷いて「故国」ストーリーに共感を示している。これらのことを鑑みたとき、桓一は「母国」ストーリーから、共感を得られるであろう「故国」ストーリーへ即座にシフトすることで、「母国」ストーリーを「矮小化させ」、「母国」に対する桃子との意見の不一致状態からいち早く脱却することを図っていると分析できる。つまりこのナラティブの協働構築者である桃子が「母国」に違和感を呈し、「故国」ストーリーに共感を示しているということが、「故国」ストーリーⅡの出現に影響していた可能性を示している。以上のことから、「故国」ストーリーⅡは「母国」ストーリーを「矮小化」させ、「故国」ストーリーⅠで述べた「故国はAである」という意見を「補強する」機能を果たしており、その背景には桓一の思いのみならず聞き手である桃子の存在も影響していることが確認できる。

さらに、「故国」ストーリーⅡの直後、桃子によって語られる「故郷について尋ねられる」スモール・ストーリー(25~28行目)は、桃子が誰かから「故郷」について尋ねられる際、尋ねる側は朝鮮半島のどこなのかを尋ねているのだが、尋ねる側の期待に反して日本の出身地域名で答えるという内容である。このスモール・ストーリーも桓一の「故国はAである」という桓一の「意見を補強」する作用を果たしていると考えられる。また同時に、結果的に桓一の狙った「母国」ストーリーの「矮小化」を手助けしたことにもなっている。つまり、この「故郷について尋ねられる」ストーリーも「故国」ストーリーⅡと同様、「母国」ストーリーの「矮小化」と同時に「故国」ストーリーⅠを「補強する」働きをしているのである。以上の分析から、桓一と桃子が協働して「母国」ストーリーを後景化し、「故国はAである」という「故国」ストーリーを前景化していることが分かる。

### 3.3 「問い」と「答え」のズレからみるアイデンティティ

本データの全体的な流れを俯瞰してみると、当初の問いは「母国はどこか」であったにもかかわらず、まるで「母国はどこか」という問いに対する答えが「故国はA(地域名)」であるかのように、まったく違和感なく受け入れられ、収束している。これは、桓一の「故国」ストーリーⅡと桃子の「故郷について尋ねられる」ストーリーという二つのスモール・ストーリーが「母国」ストーリーを矮小化し「故国」ストーリーⅠを補強する働きをしていることによって、本来の問いからズレた「故国はAである」という答えが前面に押し出されているのである。本節では、このズレから見えてくるアイデンティティをポジショニング理論の観点から分析していく。

前述したズレは二つの点においてズレている。一つ目は、テーマが「母国」から「故国」にすり替わっているという点であり、二つ目は、故国について桓一は「日本っていう国の中のAなんだけど、当然国民国家の上での日本とは言えない」

とし「地域性で故郷を語」っている点、つまり、「故国」について「国名」ではなく「地域名」で答えるという矛盾である。  
 ポジショニング理論(Davies & Harré, 1990)は、ナラティブの中で話し手が自己をどのように位置づけようとしているのか、つまり、どのように自己を示そうとしているのかに焦点をあてる。一点目の「母国」から「故国」へのテーマのすり替え、つまり「母国」ストーリーの後景化と「故国」ストーリーの前景化は、桓一、桃子にとっての示したい自己を反映している。「母国」に違和感をもつ両者にとって「母国」ストーリーよりも「故国」ストーリーを語る自己を示したかったからだと分析することができる。

そして、「故国」をAという日本の地域名で語ることで、生まれ育ったAという地域を故郷として捉える自己を示すと同時に、国民国家という枠組みで故郷を語れない自己を示している。国民国家という枠組みで故郷を語れない自己とは、「いまだに韓国籍を保持し」ている社会的立場ゆえに語れないのであるが、このような社会的立場だからこそ、「母国」「故国」という言葉に違和感を持ち、国民国家という枠組みを意識的に捉え、近代に創られたこのシステムから一歩離れた位置から故郷を捉えられる自己となりえたともいえるだろう。このような桓一の自己の位置づけから、故郷を国民国家という枠組みではなく、地域性で語るディアスポラとしてのアイデンティティを表出していると分析できる。

そして「母国」という言葉からは、本質主義的なナショナルリティやエスニシティが連想され、ディアスポラ・アイデンティティを見せる自己とは相いれないものであり、その意味で、「母国」ストーリーは後景化したいストーリーであったと分析できる。

#### 4. まとめ

本研究では、桓一と桃子がスモール・ストーリーを挿入することで協働して「母国はどこか」という本来のテーマ(問い)からズレた「故国はAである」というストーリーへ導いていることを分析することができた。そしてこのズレの背景には、そもそも国民国家の枠組みで故郷やアイデンティティを語る言説自体が在日コリアンの社会的現実と合致しないことも相まって、これを批判的に捉え、地域で故郷を捉えるディアスポラとしての自己を示していることが確認できた。

#### トランスクリプト記号

(.)	小休止	(. .)	0.5秒以上のポーズ	:	伸ばした声
?	疑問形の上昇イントネーション	[	発話の重複の開始箇所	=	ラッチング
↑↓	イントネーションの上昇と下降	> <	スピードが速い箇所	h	呼気・吸気
_____	強調的に発音される箇所(下線)	¥—¥	笑いながらの発話	@	笑い
° ああ°	声が小さい箇所	(( ))	身体動作		

#### 参考文献

- Bamberg, Michael. (2004) Talk, small stories, and adolescent identities. *Human Development*, vol. 47, pp. 331-353.
- Davies, B., & Harré, R. (1990) Positioning: The Discursive Construction of Selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20: 43-63.
- De Fina, Anna and Alexandra Georgakopoulou. (2012) *Analyzing Narrative: Discourse and Sociolinguistic Perspectives*. London: Cambridge University Press.
- 福岡安則 (1993) 『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』 中公新書
- 福岡安則・金明秀(1997) 『在日韓国人青年の生活と意識』 東京大学出版会
- Georgakopoulou, Alexandra. (2007) *Small Stories, Interaction and Identities (Studies in Narrative)*, John Benjamins Pub Co.
- 秦かおり(2017) 「みんな同じがみんないい」を解読する—ナラティブにみる不一致調整機能についての一考察」 鈴木亮子 他編 『話しことばへのアプローチ—創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』 pp. 217-248. ひつじ書房
- 金泰泳 (1999) 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニシティ』 世界思想社
- 李洪章 (2016) 『在日朝鮮人という民族経験—個人に立脚した共同性の再考へ』 生活書院